河社

下

15
1285
2上

門 イ5
1285
2

河社下

神采乃永和此藻の哥に
此さゝはいつこの清水とおりらうこしにさゝはなとも是れさて
山城國乙訓郡革岡 度毛 平賀
鞆岡は和名集に
清水鞆をなかはといへば所にこそをかはさて乃おひ
そ清かれしきことなりとは今の哥にていへり鞆は
弓射乃時の具なる道人等常に獲る是なるへに
かくれ清けたり日本紀に芸湯をとれりとよめり
こゝろ紀乃神此みなりけり乃爲ゆゑ芸ふさふとりてゆそひ
すゝしも
万葉にこれ紀乃久しきよりとおほくよめ也今も

比佐止保志由伎乃与保志茂
於保与曽訪侶茂詞之轉也
於ほ中に由伎乃与保志茂をきのようしきとと
うたふと聞こ得にそこへ得なり呂と保とは同韻
にて通せり此哥古事紀にも日本紀にも載し通
稱ともあれ通は例をいひて王仁が難波津のたゞひと
さいたりに衣はせめん爲ふれとうつろひてしふくはこそ
拾遺には衣はせんとあるさいたりは榛の木綿なめて
幸榛といふれさはたりといふへきを以と幾と五言なれは
さいたりといふれ歌に前語と明通て得はしへてこの
神示乃爲りて かけり事なれは通はしこれもなれ

らふへし
志なり爲ぬなのふし泉云々
ふれは拾遺に
志なり爲ぬなれふしけり飛わたる志紀のたゞ言なりし
此哥なり志紀はしてこしふしけしふうと紀抱なれはさし
のもの○をとゝかへさ爲にうふひなせ得にや 古拾に
あさくらにさよ打ぬけて立籠の羽にそ志なり物ぬ夜は
とあれはしおとなりし中なりなり 檜丸家集に
志なり爲 粘名のふしけり 志ふるなんは 花はかけらん
藤波にあしけり田乃いなつきにのまといふは鶯の名なり

原にうゑつくる田けれはなりと殖槻ハ大和乃国
添下郡なり　かさの浅茅か原に　わきをあそく云々
葛上本紀第三云曽々笠縫等祖天都赤麻呂
顕宗紀云　倭者彼彼茅原　浅茅原云也
きせをり合するふさるなといふ磯城瑞籬を立てそし
笠縫邑とかきし　又添下郡にありしやはまれに
わさ田にありくをれはふ何もせすして　やま日するとは
絶角八今ハ作ふわくれなりわさ田を添せんとて
わかいそ出しありつらき春日をうけ何もせすして
やすひをさらんとんつるひまんなり　万葉第七ふ

春日なる田に立つ霞みえつれは田に立つ霞
大宮のらひさうてときこえひきすなにうもなんさそれ
内舎人ハ昔ハ廿一歳より召はいちひさうと御りとは
ほすは年よをよくさりけりかや
みなと思ふくひ中門をかやとらちなやとハ八つなら
鶴をみよ谷なれなりさんするみとえ共ゝなを
いり中門なりしとのもいすをりやとわらなとてはるの
もいすなれをかいれなり日本紀万葉なとの哥
かゝふ思つせ略して　まとのといふまかゆれんも
あゝ彦ををいり万葉十三に挽歌ありて次田兄かへりと

かせきハ中よ我朝乃帝を万葉集七よほりかへされたる
故く初め二百余年の此ころふなしてうへひ然さ給ん
きかゆや

泉川にそはせんなきれと公の文人ミ橋とは
續日本紀云　天平三年八月乙酉宮城以南大
路西頭与甕原宮東之間令造大橋令諸國司
隨國大小輸銭十貫以下一貫以上以充造橋
用度又云十二月己丑始運平城器仗置於恭
仁宮辛卯初壊平城大極殿并歩廊遷造於恭
仁宮四年於茲其功纔畢用度所費不可勝計
至是更造紫香樂宮仍停恭仁宮造作焉

ふるさとは聖武天皇の久しく世を治めさせ
給ひし余處なりし事唐の開元天寶の
ことをおもひかへし所を此所の御事なを良吏を
らしめて今此あたりの人此おもて
訓刺を知らぬ所なりや　神はなくさとにはらわせ
いつしか万葉集七云　廣瀬河袖衛許渉幸也云々
發乘して住せぬ神ふる川にはきぬ郡
よの水のはやくならぬなりけり日紀十年須蘇衛河
もとよりて十七年は安史美都加須毛とよめり法紀

參河國寶飯郡宮道 美也知 文字山も此ことなるへし
をとこ此こふ此見ゆふこ此
はつまやのまや乃あ留り此面此ゆれ立ぬ此ことの戸也
和名ふ田河をあつまや海河をまやなり今ハはつまや
をやそまやといふ和名のこゝろふはつまや本を
志ゆといふことくはつまやをあめくしあ屋といふ也
この此ハ屋戸なり記しるせをひらけといふ古語也
かすかひを戸さしもあらしてこ此のこのと我
なるめれしむしかくきかせわれや人つまとハ
かしかひハ和名ハ鎹乃字也かけかきなりとさしハ

須なり我なるめハ今東わ世ゆさめの洪世ゆ此
古事紀ハ八千弟神の御哥ふ 遠登賣能郡須
夜伊多斗遠云々一万葉牙五云遠等咩良何佐
那周伊多斗乎意斯比良伎云々
かとさと同韻ゆく通ゆれたなれハされ なり
さかすハをとれをさを此ゆとくそへらう字也
結れたかけかもはらもはらしてこ此われさてめなる
ゆしきをたかと此と同韻ゆ世ゆ来まやをかく
いふ此りしハ頼ひ換を此例ゆ世ゆ此とハきまや
あくそ此ゆわ世也 人法ゆとハ人乃妻とさ此ゆ

[illegible]事も[illegible]ハ作書なるべし
つゝ[illegible]ん[illegible]ハ戸を[illegible]
走井のこゝ[illegible]刈をさめそれハこうまゐ作ゝせて
糸川なさめ

走井ハ万葉第七云
此小川白気結瀧至八信井上尓事上不為
支
隕田寸津走井水之清有者度者吾者去不
勝可聞

此走井ハいつ[illegible]の国ニ[illegible]と[illegible]も前[illegible]

大和の名所をよめ[illegible]中ニ[illegible]大和なるへし
こゝ[illegible]刈をさあといひこをこふ[illegible]ハ[illegible]といふものを
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]とは[illegible]
[illegible]井ニ[illegible]とは[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
の字を[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
自海路泊於葦北小島進食時召山部阿弭古
文祖小左令進冷水是時島中無水不知所為

則仰之祈尒天神地祇忽寒水從崖傍涌出乃
酌以獻焉号其島曰水嶋也其泉猶今在水島
崖也肥後國風土記云球磨乾七里海中有島
梢可七十里名曰水島ニ出寒水遂潮高下云云
彼記ニ井をみもサと何やほしも今もこもわを
さししとかくへし

いせの海は清き渚に塩貝やかのりを浮まん貝や
ひろいん玉や詠いん

これは旋頭哥なり清き渚は名處なりと
いへり得撰集にも思ひくかよひ侍りけれ人

いまこそくりくなとそのめおほれくおもひけの
浮ひにいせの海にあらくそりまてきくむ
さしくとかれ侍りけれは

おれ内侍

人かはこゝろはれきこれて清きなれさといへてるさん
從万葉第十ぬる萬葉の竹愛浦にくる玉志を海
清きなれさとよこゝろれはいつくにをいふへきれ
又これは不の名によめはゆくにきこ百年十六に赤人
ぬは玉は粒のふけはけれ詠されは海清き川原にちとりしなく
此哥吉野にくよみ出そ海はへにかしこに清き川原と

久也於志止度刀志止度然為志波國曾昌由流也吾家
良曾昌流也於志止度刀志止度
于時井上内親王為妃識者以為井則内親王
之名白壁為　天皇之諱益天皇登極之微也
これをもて門合く知へし　葛城ちは西より
ゆりく東に向ひ豊浦ちは南なるに向ひて
其西の方に当りと桜井はもとより桜井桜葉
折其名大きなたへり　又昔より葛城なるすな
はち其浦なるとしらへるかや其所其名ゆかを
葛城ゆく　えのも井をそつ[illegible]なりかれたり

しるはら其所哥に
かつらぎや其浦ゆるの えのも井に相見しまを志つ月新
其浦なるは高市郡なりしなほ万葉貴人なれは其浦なると
いへり　元明天皇　藤原　文より[illegible]遷せ給へる
ゆへり　波集には明日香川の邊をさしてなほと
いへり　葛城寺は葛上郡なる邊に文に相似し
かしれ又宗頌の名所ゆに其浦寺　高市郡と注
せしまを浦はよれをかされたる哥は
葛城や[illegible]ちは煤の月西になりまて郡をこれ邊
[illegible]其明の哥とおれしやうにしらへくよめは

万葉集の哥を採撰より初めぬれそれを
詩集に詠しつ其中に同し哥第二部にもいれ世に詩は

第一

松の浦に鶴のりすんしきもなかむ玉あれ此に拾ひ給へ
此哥拾遺新三に新詩又玉葉雜二に

第二

いたしら此世中に亭結ひ松にもとけれしかしこれ
拾遺意にと新意とあれは人丸とて入り貞麿か
哥なり

第三

なしくもかりの家面かこわか侍さの濱りに花もあらなに
新勅撰と續古今並四覇旅採之

同

明日香川かはとさらに立雪の思ひ過ぎ意に詩なるに
續千載新勅新千載意に

第五

稲宿に梅花落ちぬ久かさのあめより雪れぬると見るまで
玉葉新詩拾遺共に書之載之

第八

[illegible]

侍りてゆきまかせしの事かきて此作者の名をあらはし人名をゝく
新勅撰集二続後撰集一にわたりてある人の名をも
載す

第十二

志かのうらの波ふとも世にいへるは八代の中にも末そんなり ある
拾遺集二千はよむ人の名は同名は坂上郎女と字
加へつかす
古今集なとは撰者拾遺抄にたくさん載せさせ侍り
後撰集に沢山おほくことに異代々の人古今集にハ
有て後のよみ人しらずの代々ぬこれより拾

後拾遺まてはかゝる事なし 後撰乃奇特
拾遺にかゝはらしく載せまいらせて後撰にはわきて少なく後撰より
後の集をもえらひしもよくすまいり候ぬや沢山に
ならへ入、後拾遺抄にも集にも沢山に詞すくなく
此のかたふかくの人かの所に出る後撰 京極集にも三代
拾遺雑上
桜散花の所にもこゝらの人つれもこゝろもなくなりゆけ香まして 兼盛 法師 放これため
人しれ後ふる作の所に桜のかをさそふとこそなりけり
新勅撰 読人
神なひのみむろの山をけふみれは下草かけて花をふみける
後撰
みやまには霰ふるらしと山なるまさきのかつら色つきにけり
世にふるほとはよにたのまれとおもはれぬわかみのさかりすくなき

新勅こゝろすけこ
あさかりと記とりとさくらはぬしかそ花のはなりとさくてはすは

拾雜上 貫之

續千 意 宗千
年月は昔ふるはなれと意しきるはかりなりけり

拾遺集

拾遺
天川のちれはつゝふそけきといつとも志らぬ事出の所しか

千雜上
流乃糸は

桂樂は今は

但拾遺は作者作者は法師 千雜は宮也

上

新古 意
いつまゝふ行かれぬ世のせゝ男乃はれんてそ人もつゝけれ

續古と意 二貫之哥
いつとてか我意やまんちもやぬ濱なれはけ乃はかりそもも

雜上云爲るちをのくはきこゝろめあれかくり待り

今は時ふとも尚さの朝臣乃め死前かよそて法ろ

つ書れ

今義別雜
奥津濱くりれ花をこしくりくかよはさん尚なりも

重義ふは爲るちあく小槻のあきこゝろか

なりけ海時法かりしけ海芸政朝臣妻とあり

意 清まりしや本れ古法の石法物いけれの人れ新をこゝろん

今意下 新拾遺 意 いつ
れことなとりしも 意 我ん言り待ちもさこめ見せる

千雜 秋
さひしくこゝろひたりや花なれ桂よりれへもあらん

ゝはゝへきれ夜床を清めよとは夜床の
都とぞ入り
新勅撰集雑四後京極摂政家百首歌
草奔十首よみ侍りけれ
寂蓮法師
風吹けは浪さへ雲のよそに見てよはまてかく宿はなれなん
此歌は神のよりし白浪のかく万葉第一には山と
賜良歌出丸君をは河島皇子の御歌と載く
床をも天覧を返し奥義抄には浪か武には角
のかみの紀清唐と浪なし ひろく新古今集雑二
とハ万葉第九にありて河島皇子とはかられたるも
見ゆるに撰者も見ゆして載られけるにや
いかにもおぼつかなき事なり
新勅撰恋四
侍従具定母
ほしわひぬ我袖ぬれて旅ねの浪
続後撰恋二には此上句旅寝かゝ浪とよく
定家卿又俊成女とて載しゝ
是は具定母是れなる俊成女也
恋又
新勅撰集
光孝天皇御製
月のうちの桂の枝を折りかねてなかきこれかゝるころかな

風雅集

前権
前権

新拾遺集

新千載集

旁も行りけり女の哥なるをいふ人〳〵志られたるに
事の所にて
同し集に
きれともの
きゝよりハ天川原にあせなんそこひともなくたゝわたりなん
此事四句集にはうれよともなく六帖にはよとあり
行恒集に
そよそ時くれ君なれとこと里のはふ行恒にて
同し集に
菓は原にぬる白玉と見へ法は姉は結ひ者なれ君
文集天津橋詩云柳枝嫋々風繰出草縷茸こ

雨剪劑　今の哥雨行れよくれつる時にせの菓
なと皆此下句より出類同し集に如此同ふをいふ
名を和名集に奴の字をかけことも法ふをとおもふ
それは大ぬなるへし行るみとのこゝにておきなく
たりし時に法は法行を法ふをとのなひ法より
法ふねといふ事はしはりけるよしいふ如此つは
同し集に源さしけれ朝臣十月又うりにとこ夜を
おりてさりて行りけれは　讀人志られ
名なれと君の頃にふ此ぬれとしへこゝ事に意なりけり
秋を法しなりあるも法也くけれとこゝ夜とハ名を如此也

[illegible]れと二三日待ちゆゑ事なくてとふよりく
[illegible]り[illegible]れもこまねをつくしてまれかうへり
かれくぞ待り[illegible]

中原宗興

山里の草葉に露をしけんこの志の衣ぬれともさま
[illegible]の衣を蓑代衣といふをもとにこのといふは
国の名をよせ志のといふはぬとぬ志しきぬをよせ
この志のといふはかたこの心をよせり此集乃
[illegible]めに嫗り雪にこのしろ衣うらきつとよ
[illegible]も蓑代衣を身れ白衣とよせし也

[illegible]りしま似たり
清[illegible]乃[illegible]といふ處御らんし[illegible]御[illegible]も[illegible]

菅原右衛

水川の白糸もへて[illegible]
[illegible]白糸とは麻をも水に[illegible]して[illegible]
[illegible]元詩云東門之池可以漚麻又云東門之
池可以漚紵 [illegible]
[illegible]
日[illegible]
これ[illegible]

小も出ふよせて何しかなる也海はあらはなる也海をう
つしあ也海てられいふ也もあらはてなりぬへ御海なり
宮を守る境をふ法の海かしなつれなりけれ慈
得る所なも庭を知れかしなつれをよれなりとう
なり
長松山の亭の法を拝りし海しく海しせ
拝ひ見ゆ也
海をといひしともかしこし花山を忘れしとなし為れ拝れ
此ことを書かはつるなれこと拝り
源山水を拝る事なれにこり法めて宮さをこの海をの居ゆき

僧正遍昭

文集賣炭云可憐身上衣正單心憂賣賤願
飛雪
聖徳太子の御哥の次に日本紀にし海も哥を
詠しそ拝そ好乃人れせ海れ
浮橋遺ふ長楽寺ゆく左江の霧といふんをよそ
結りせ海

左江正言

山こゝ朝の霧を見ゝ也えたる村の霧なりけり

能因法師

おもかしも霞そ見ゆ海里れ朝の霧は見ゝへかりけり

三月尽こもりに小部去の時をよみてよみ侍る　中納言宣親

子規のかはねまた夏たけてふかして初音つかはし

万葉集十七云　霍公鳥者立夏之日来鳴必定

かゝれども去のうちにも夏はすでにいらるゝ

よしなり

今案に集名部に作風似雨

かの作の去年の神をかへさぬ帰ぬ鳥ぞ身にかへては風もなれ

此歌どもは去年にいづとも去とて此部に入それ

しかありけるかな

同じ集に惜秋意の心をよみ侍る

我恋も秋の色はいつのよもさかりなかりけるをいふて

はかなき歌のかなかりつるやかはりつるなり

山の井の心をよみ侍る

山の井は浅き心の帰るにも浅き中にけふの御かけなる

恋にかはりにけりやこひの心とはいへつれなや

同じ集にもとの人得りける人のかへるをみてあひより

きくしをとりせらりしかも意伸してうつ院よ得すさひ

こゝとなんありといひけるをきていはれかし侍

源保法師

よりハ左門しかれ今し

馬内侍

さしぬきに霧に濡れ衣の色に見えは独ハ寝なんとやハ云濡

はれたさしの武部か哥とさしぬことをみ濡ことのく

人にかれひく濡さり今濡とのなり

千載集に

昔をそ濡さハかれ山陽たかそあふこそ濡とふとか云濡

風雅集に

鶴雅

頭入かへさハかれ也としたれそれ也へくれ山路か云濡

鳥羽院くらおりさせ給ひとれ濡庭花年久と

いへ濡ふをかせこれ濡つり濡に濡ふり濡

大納言忠家

ほりう冬し花本れ梅小咲花を年もかれ濡ひ濡

昔をかゆくふとよそ濡ふや

千載集に

清輔

詠田姫かさしれ玉の結をよわしみたれ濡りとこゆ白雲

はれ八方葉身九に泉川みくにあ濡哥をこゝ濡

花の哥

ひこ星れかさしれ玉の書こひは乱世ふたし此川乃濡ふ

壬二集に

よみ出せんと俊頼の みかれくを難しなく人すくく

俊恵法師

夕立のまさ晴やらぬ雲なるより同じ光とも見る月の那

新古今集に

宿の初もはまさかりぬ夕立の雲さりけるすゝ月かな

同じ集に 隆源法師

忘ひ河ありおぬ海よひの海かりも波路をなて切通ひ

出れば長恨哥に 以海方士か幻術によそへて 雲を

まほうしとよめ海の又俗に 雲ともうしともなくて

そこなれ花もかけなとのこゝ雲を海かりといふそ出ふや

みよしの花の雲をはふれはこしの白根に素浪なく

出れば 俊成卿の哥なり 清輔朝臣の哥に

小初瀬の花のさうりやこの瀬の川こゝ[illegible]より[illegible]

藤原 長經

我ひは河ひをあてよ海さりきれ忘る雲のうちの色なるとも

俊成卿

その方は忘る雲のうちの色をこよ河ひをあてよ海かりなれ

方紫には 雲と雨をと 於これらをさへかよりせ海事なし

海しく以雨とひなと 更にかよりこれ海はいよしなる

かりきぬり

順集に

かのくとはかなき流をこそ見しか[illegible]

貫之集に

ほのくとあかしの浦にこき出て昔ののこさ波そ立

拾遺

桜ちる木の下風は寒からて空にしられぬ雪そ降ける　貫之

緒成人をみはてやむしめか桜ちるとはよしやしめ見ゆ

錦かと見る花の入江の浦風に尾花波よる秋の夕くれ

新千載秋上　輔仁親王

秋風に尾花かすゑに浅茅原山里よりも寂しかりけり

古今

桜ちる花の所は春なから雪そ降つゝ消かてにする　承均法師

後拾遺

桜ちる垣にいとふ春風を乱れぬ君を嫌ひける哉　坂上定成

千載

桜ちる梢の雨には世の人も袖そへかはかさりける　能因

新古今

桜ちる春の山辺はうかりけり世をのかれにとこしかひもなく　恵慶

同

兼盛

桜ちる春乃末にはなりにけり あまゝもしらぬなかめせしまに

貫之集

桜ちる卯花もまた咲ぬとも しらぬは春もなし

後撰にも 得ては こゝろうれしくもなき

右の哥は玉葉集に 此道に寄

桜ちる花の色をも 思ひ忘るゝをしむ吹乃風

風雅集

桜ちる山下水をせきとめて 花のなごりの かりけり

新古今　　　宮内卿

逢坂や梢の花を吹からに 嵐ぞかすむ関の杉むら

新勅撰　　　覚延法師

住よしの松のこすゑも霞けり を里乃の春のあけぼの

新古今　　　後京極

吉野山花のふる里あとたえて むなしき枝に春風ぞ吹

玉葉　　　為兼

花もみなれし山路に 枝に年ふれて よめしもさきぞ近づく

新古今　　　後京極

駒とめて猶水かはん山吹の 花の露そふ井手の玉川

続古今　　　後鳥羽院

山吹の花の露そふ玉川の なかれてはやき春の暮かな

新古今　　好家経

おもしめりあやめそかほり郭公鳴や五月の雨の夕くれ

金葉　　経信卿

万代よかりぬ物を五月雨乃志つゝよかりけるやめ乃り

　　為兼

大井川を海ふこ雨海橋のうゝ方人をこ見雨の夕くれ

　　定家

小倉山志ゐてこゝろ此郭るくきのふ分すれよもれもこち家

これを嬉き葉恵を清師ゝ哥よ

きのふよりけふ海さ世海紅葉の此河すゝ乃色をさ尺てや海ん

これをさう遣そ海ふ紅葉ときのふハうけき

海とふぬし　さて海世海同なり

新古今　　家隆卿

霧志ゐれも海山陰の下紅葉ぬるともおらん秋のかさふ

これハ古今ふ業平此　蔵を打て人ゝ海哥

ゆる紅葉海

ぬれつゝ此志ひて打つゝ年此海よ志ハいくもけりと思へハ

新　海哥ふの色ゐまり行妹風ふかれなて廉乃書やこふん

古今小町　こゝ海めなれわりをうしと志て也もやられなて海此あし

新古今式子内親王　　路なりき庭の海義ふ孫ほ世　霧此此こな海まほのこ志

新古今　藤氏

明はむ日の山の雲は隙にて又立の浦の嚴乃秋きり

同　新しあく神うらしふ浦も殆しさあらはれ雲は夕ふ也

同　かりはむ宇道乃さらに人の間これ浦ゝこゝ山乃さとれ雲は夕ふ也

續新古今　ゆかぶ人も　秋風まで浦ゝ也浦生田のもりれ雲乃夕ふ也

新古今　浦京橋　りゝ浦ゆゝ雲ゆゝ嚴の神忘れ来れ家ゝ夕かけるとも

玉葉　いさ浦ゝ　宮家　雲ゆゝ山れ松の葉乃浦はとも見さゝれの雲

新後撰　浦西園寺入道前右政大臣　ゆゝ雲ゆゝ嚴に詩し　桜を

新後拾遺　同　立かくれ　そ天下も花の色なれ雲ゆゝ嚴の明るれ雲

新拾遺　浦花室院　所製　ゝ山浦を夕こえ花と宿もなし　雲ゆゝ嚴にしよひかも稱ん

同花　家經院　瀬をもゆゝ見ませ鶴川のわれくも東に浦ゆゝとそ思ふ

これは伊勢物語に山川といふ所をとこわきて

浦ゆゝといふ所をとこせ浦へり　又万葉書

十一ノ

ゝ嶺より出る浦ゆゝの見に浦ゆゝわきてそ松もふ妹に浦ゆゝ夜ゝ

新古今　宮家　清まひぬわ浦しふ人の秋乃色に身をこゝろしれ嵐の下露

これは古歌に浦ゆゝ哥をとらはしてそのうさ

人忘れぬ心ひすゝ夕れ國にて身をこゝろしれ杜に浦ゆゝれ

新古今　武家内親王　忘れてはれなけ浦夕ゆゝ我のゝ忘りくる夜月りを

これは古今ぶ

人志れぬ思ひのとこ[illegible]わひしけれ[illegible]
といふを[illegible]

公実

思ひまひ人[illegible]
これを[illegible]集の哥をとられ[illegible]

殷富門院大輔

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]こえぬ[illegible]山のいり[illegible]
[illegible]思ひ出よ[illegible]
[illegible]

[illegible]千[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]その[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

新世代詞はまれなるべし

かり衣袖のなみにふやとは海賀は月も弦様のこゝろにすれ

千載集 後成

て海月のそこの様に庶やしきりとゆふかつらの山の谷川の水

新古今集に　後成卿

昔こふしりしとしのしたらしの様意しきそもなりけり

新續古今集に　桂中納言雅世

むかしこふ昔といひし河の山こゝろ思ふ法こゝろ乃下に

新古今集に　西行

山ちこれ此の河あるの鳩の友よふ聲にすこれ夕くれ

玉葉集より　浮京極按政左政右

夕下ゝ世あるに夜ますむ鳩の独友よふ聲そさひしき

新勅撰雜　左衛門親王

春日山まさもえやぬ草に烟こしかれ萩のかけ原

新續古今春に　前中納言雅孝

りへ出て燒こしかれ初草にまさくらわかれ生の色かれ

千載集より　後嵯峨

世中よ居これなきれ此ひ入海山の奥にも庶そ此る海

新續拾遺より　參議雅經

此ひ入海山かくもまさ此庶の様に時や煤乃夕く連

右建保二年内裏秋十五首哥合に秋の庶あり

後成氏の哥は定家卿百人一首に撰ひ出されたれ
ふハ如何へ其れ今もとゝ所にも記せるふとり用ひられ事ん
八雲御抄に拾遺集後の乃るよりし事ハ海と云り
新古今集に　西行
小山田の所にて所く廉乃言に雅なされて聖のうたん
續拾遺　前大僧正隆去
曉の雅ふかく思ひ入るかとろうさせて為也嗚ん
新古今　恒三位　粉政
しらの所也すゝ嶋風を身に志めて吉地のこけに月をこゝろん
續古今　僧正行意

しらのわ也吉地の岩此れなりしにて雲もかゝれぬ月そこ沾
拾遺集　續人　志ゝ
物ゝ書は清てを志ゝしこゝろりなん花も紅葉も枝にかきこゝろ
新古今　右上天皇
此こゝろは花も紅葉も枝になし志りし今清地松の白雪
同集　長明
嶋風のいたりいたらぬ里ハあらし此我ゝ此處の多言
續古今　順徳院御製
松風はいたらぬ神をなれたる里よりの家つゝん
新敕集　大納言長家

春雨まちかむこれをかれくりしみそれ見れこちらこそ
玉葉　一条法御製
くらはれ雨ふたらひくちの花を春のそれと思ひけるに
新古今　橘中納言国信
春日の雨のかりそめ海菓のくまつれなくこゆる春の河の雪
信成日九十賀二屏風春帖花草　御製
百りの雨春日の雨へ乃菓のくまつれなくとても春の河の雪
同　秋帖月　同
妹の月白のをこれをかさしの雨を海橋に霜をさえ海

ちりの世これに似て海雨うけたるかりつれもこすまじ
新古今ふ　好法大夫大臣
さめて好夏なりけりと思ふもはかなくなりけるとも何ぬ
身ふそへ雨の雨うけも清なりん夏なりけりと思ひけり
これを源氏いの菓下に河の雪をとりふ　元輔
明くれの雨ようれ雨ハ清なりん夏なりけりと見て来しへく
新古今　大納言雅信
山源に杉のむしろ立つ人ぬすて　夏の雨は花のちるに
玉葉千五百番哥合に　信成日女

高徳の松の緑も清ふまして尾上の風に花そちりけり

桂僧正永縁

金葉

笑ひにふめつりしけれは郭公いつも神音のこゝろしれ

寂身法師

續古今

まさきかね人のそあふは郭公いくこひなくも神音なり

清輔朝臣

新古今

立田姫かさしの玉のをとよはし乱よりとも人の目

白露

玉二集

白露の姫山に風やたつて姫さのしかさしの玉にみさし

上総乳母

浮橋遠

天川とゝ浮舟のから松にふことをもかけつ浮舟

皇太后宮大夫俊成

新古今

そ松をとれ三ヶ舟のから松にふ義秋うき川高の玉つき

同

千載集

六月雨にそしも松の煙おこめり塩たれ浮浮須戸の海人

知家

新浮橋遠

鞆波江のすゝもたゝ火のおこめり芝屋の里に春雨そ降

藤原公紀綱

千載

さ波のみうらの山の岩つゝきこせしや人に花のさりを

大僧正慈鎮

新古今

見をさせられしかの傍ぬりとなりなりしの山の表乃けしきを

同　　參議雅經

いたる山ゆかさなる海山をもとくしもいへの法乃志ろせ

風雅集　　浮家極樂院

かへりこ海山ハ海ふかさ物りて麓の花も八重の志ろせ

新勅撰　　家隆卿

いく里ゝ月の動りもあはれ柿さて山の嶺の表風

風雅集　　定家卿

雲海ゆく海の松風もあはれ柿嶺山の雲の

新古今　　殿帰卿

秋風ゆ物ひく雲の花ゆ月の鏡のさやけさ

風雅集　　浮島村院御製

蔵雲の花ゆ月の鏡をさやけきよりもあはれなりけり

同　　清浦　新院

あさしらふいとひもそし村雲の花ゆ月ハて鏡なりけり

浮橋遺　　宮治前右政大臣

春の月ふ河れや郭公たゞ一聲乃行方もしらん

金葉集　　藤原殿浦新院

あとゝきとゝ河ゆて色ぬ海聲にまり　詠者花穴ふなかめとそすり

千載　　浮橋太宰大臣

[illegible]

文選應德璉詩云朝鳴雲中音鄉一何哀往
春朝北土今冬容南淮遠行當霜雪毛羽日摧
頼

杜荀鶴詩云古樹藤纏殺春泉展過渾

清輝原風を詠ひ給ひ来れ霧絶ゆはれもとれ霧を
いつ里もこれはなれし古里は来れ霧とあれ滴といつ里
まつ人さへいつ里志もし御人とも志ゆゑを老ぶふ宮
なもとはそとへたりもしさゝめて来の霧ならてもとの
志のことなるといはなれされたりなしといふ
いはん河のへはかゝ河やまゝ海となるゝ雪れおちかゝ海を
志つゝといふとのゝ執するより おこ里り
ちゝとなよ志れも草乃かりふても霧なるへき神のうへかは
或云此哥は歌河和哥不御命なり人へこ里を
詠し里られもなふといふことハ人ゝ○とも万葉集ハ

よみ海よふ志のゝも草といふはやさしき名なれはよみ海
なりかゝれすゝ河れらふ玉海をうへと色うれとそ
申されけるといへり此説うたかひし今れことをかり
入道前関白右大臣は仕ける時百首哥れ中に悲恋と
河海を河れ和哥不御命といふや万葉集の中に
まゝて志のゝも草とよみ海哥なれを後撰にいへり
彼集にそとのゝ海はん此志のゝも草いつゝより様とと
めし里はん御詠なし新勅撰状
重海よふ志れも草の霧れうへに夜をへて月のさへ
新千載集状
深西園寺入道前太政大臣

去林百何曾見一人

友にの宿も清月にとらん家をハ知やむし住きと
此哥に詞半ばりひハ歌えられと詞りつ家を落
うりよれ物をもてかれぬかへし
遊仙窟り婀耐を詞なめとよめり詞き風乃
吹ひつけくも詞ぬめしといへ清ハ古きを
かけそれ
延喜式六月枝祝詞に吾を哥吾といへりよれ
をかよりれよりをかよ清なと源氏にをいつり
いやしきをのくらいといふなりもこれにや古事紀

すぎり記めれ御哥に松の浦橋りんとの浦橋も
松と同しなとのことなりおもへてといふと
おもへこふかりひくきこゝ也とおれこゝ也
なくかやうにいひなき也詞なりへし
松の宮ハもりてしにも古れこのことく用ゐ清
事なほくこゝ
日本紀り田心姫これをたこり記めとよみたり
古事紀には是を多紀理毘賣とかへりことさと
無言返とも也とおれし事なり心をこりおもへハ
凝乃爾れ也ハ二條よわりく凝結として失ぬ

貞観老廃不擇官云々
此時の哥なとにや
哥合は寛平の御時后宮哥合是貞親王家哥合
なとにして御時中納言御息所哥合ハこれより
さきの遊とせしなりにけりと聞侍し
百首は後鳥羽院本として侍りし人数に入れ
主上の会を合ておもうけくおもふ也和哥の道へき
つたはりハ古今集のさきより聞侍しよりあるなり
おもうにはのうちのちこれは侍るなり侍しら
八とのそいの物世侍事に侍取きより詞花集まてよ

ゆ聞侍し去れ曙白雲きえき吹風たえといふ詞を
侍り御代の御代より人のこれぬ侍るなり
侍りき集を　俊恵法師
名ふるきわかの浦をきてこれをかつね侍りはとく侍り
神武紀に紀伊國荒坂津亦名丹敷浦といふと道也も
おもひなくし朝霧集に和訓阿闍梨能也身
おもつとし
こゝろ秋はわか侍となりしは住吉浦乃濱千鳥の根ざしたん
といふは道もよのふかれ侍る初此哥に語く恨
法師は前朝の兵部詞書にいたく能因に侍りけり

新古今に

浮雲大臣

今この海の裏は月より詠れ今日も詠らふおきつ白浪
此哥と月をとき海よし世明かいへり今日を詠らふ
詠れとよはめつゝしらるゝ作れと哥にはなりたる
浮撰集

秋の海にうつ世海月を立海り浪は詠らへとも如くに
これを詠用ひ其月ひ海にや
かくてさい今やかきりいくつゝる稱ぬよ此月の親をのこそ
此世は長明か新古今によ此哥三首之後といへれ

中の一首なり今はなし治定の時の此ことは乃ちに
方丈記下

月親は海山のもとに清かりきたへぬかりをみるよもれ
これは新勅撰に十二光佛の中不斷光佛を源重の廣か
よめ海哥とくいまり世明の心りかなひられも
かゝ世は親にや
千載集にみこにはなりし海は月の時雨なれ度わたるせ給
つり日海は池之苑といへ海こゝろをよ月せ給ふ世海
池れる汀の柳ちり元れて浪の蔵にはなりなりたれ
これを東都地名には大原は奉此給ふて清世給へり

かなり。又玉葉集にも 浮 家種 楊政家に百首にも
侍りければ
　　 新蓮法師
このうちも稍ふるゆゑ山ゝ此外のをとかたゆゑ海の名
古里を紀伊守花光か哥といへり 世にも 信と云き事
とて 詠し
俊成卿九十賀屏風春惜花
　　 有家卿
せゝ海ては梢なるゝ山様あれは雪と落ぬ浮との意
これを哥をおりしろ行を九十に古今人平に
さいはへしや

續浮 拾遺集に 源山曉月
　　 同卿
花をの惜こなれ海みよし此梢にぬつゝ花の月
此哥おりしろくはかなりを上るよりきけ山ゝ高嶺を
惜こそ海やゝるゝにや 百葉にも 古今にも 煉乃月と
よこはしくも 秋のんをいふ海をも 秋にいれさしぬをは
新郎にいれたりさいはしに 秋の夜乃月といふとを
梢にぬつゝといふにて 曉とは なるへきにや
信に山を 信濃なり 古帖に
夜ゝ山に海をとり 古今の海信の山に 光海にし

新拾遺集に瀬に水寄

山城の井手の玉水の尾に保とも鏡の山の影に見し
万葉集に山吹の花も川を読みけと読をみれは
雄くわれたるけふ河なれそとは咲へあり
を絵とのみいひて山吹とせん事やいつまつき

続後拾遺集花の寄に

ちはや人の神なはりしわたる代かへしの花見は風
かはらのかへしの花をは後撰集小町か寄に読は
浪分迄と紫蘇折つたなし
いはもかは井手の花見てこそ見けく吉野川瀬の山吹花

春けてといひかへものと後撰に寄し

風雅集に

初瀬山ひたふる月たかく見えてとよ鏡の影の深き
初瀬は大和の郡にあり吉浦は伊勢郡にありてその
なりけ十市郡を満く初瀬は東なれは代々に
方角たかへり

新後撰に

家たかし仏人の此蜂風に月すえの白雲となる初瀬の山
仏人は源氏物語に初瀬は名所なり長谷寺の
月と京よりかへしと見えかたによりて出て契られ

なくしてしくかしあるにはかなくして ぬすめなり
ことなるをもつて 貫之の哥にも
拾遺
世にふれは またもこえけむ 秋ことも 春も又 内大臣
金葉
春雨に 松の緑も うつりてそ 風にさそはれ 花桜かな 覚盛法師
千載
けふ過ぬ 心の信 や風にさそはれ 桜かさん 沽徳寺度
新後撰
霞にも 風にさそはれ 山桜 いそく道の なかるらん
かやうに よめる哥 あまたあるへし
三代実録云 貞観二年九月十九日 丙寅詔

下野國正三位勲四等二荒神社始置神主 延
喜式神名帳云 下野國河内郡二荒山神社 名神 大
此二荒山を今も二荒と書て日光山といへり
性霊集第二云沙門勝道上補陀羅山玄珠
碑云此補陀羅ハ二荒の和訓なり 益田池
日本後紀云 弘仁十四年正月丁巳朔丙子 新
錢一百貫賜大和國充築益田池
性霊集第二益田池碑銘云粤有益田池両尊
鼻孑之州八嶋初導之國地是漢譜之舊宅号
則村井之故名去弘仁十三年仲冬之月前和

州監察藤納言紀大守末等慮元陽之可支歎
膏腴之未開占斯勝處奏請之論詔即應愛則
命藤紀二公及圓律師等劒功未幾皇帝逝駕
汾襄藤公從之辭職紀守亦遷越前今上膺堯
楫讓馭舜寶圖照玉燭乎二儀撫赤子於八島
簡伴平章事國道代檢事並拔藤廣任刺史兩
公檢校池事成也不日畢也不年云云
茂納言ハ太大臣三守此時中納言なり今茂
あきくこそ説のこゝろ
碑もうせくこそ立ら説を
詠まりとは人丸集に
もりま

そらかりまもるは池のうれぬるハくれともたへぬ雨にそ
これもうけるれそのことのなり
行恒集に
秋の夜は夜に入ぬ月よりハ和葉は色そてり
恒集兼合乃判詞にも夜まへは庭の面をこれは月数の
夜のうちなれは花いろくにおこれたり夜の夜月夜
うちはせくハ春の事なれとなりしハかゝるにいつ
こともなり花にも夜の事なり
新後撰集に神祇
右上天皇
名りしなりしをもかゝぬ松の庭乃神のちかひハ来れ代のこゝろ

新拾遺集 [illegible] 志やう ふえ ひちりとき
ごと [illegible] 讀人志しは
うしやうし花 [illegible] 風かよひちり [illegible] 人のことひいせは
萬葉集 [illegible] 秋いて [illegible] 所 [illegible] 志 [illegible]
續千載集 旋頭哥 俊成卿
緑子と [illegible] 人も [illegible] 世をとる [illegible]
[illegible]
[illegible] 隆信
[illegible] 世 [illegible]
[illegible]

[illegible] 旋頭哥 [illegible]
[illegible]
新古今 [illegible] 御製
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
新古今集 [illegible] 御時 女藝人 内近 [illegible]
[illegible]
[illegible]

はかりそ命たいて惜らんはかなはへしこひに志ねとも
意をしぬともといせちに思ふ思ふなとふこれかれはあこひ
なんよりはかなに命をかつんといはんこれをいふなめ
玉葉集に湖邊松
よせ侍り浦風はしれさて陸に志はしを知ると志ふ鐘松
浦風の何しれに松さて陸なる海はことはりかはつるし
こうあこれ入ぬる磯の草なるめ神さへ浪の下に朽ぬ海
見は方景に埴こそは入ぬる磯の草なる色やといふをこ出り
入ぬる磯といふはりにてはれらひてもきこへぬを下に神さへ
なこれ志るに朽ぬるといふかくそらひたり

風雅集に
こまり船いりぬ海磯の浪れ寄はこよひ夢にこちくすなし
山出に入ぬる磯といふを入海なとのやうにふんはくよりれ
こ海にやそれなるへ又かんくすくなしとは何れんとせん
五月分に入ぬ海磯乃草よりも色ふ月そみくすなし
これは五月雨をいひつれをとりはるにや
とりせあれ蓮のちらしれ花ろつ元さへをくにかふ花
あはふとは色にてまぬへりを海をもうせとそそ
こ海かく樹をやとしせさんごちするにや
そ海れ屋に花にまちられて朝に雲乃海かひやくれ

こまり船し
い舌はこちくすくなし
こちくしく船し

分何罪分不意之間條亡子云々
此條亡をあらしめさることなるよあ御は義例なりけり
めとはあらさるなるにの給ぬるこそ給へさるといふと物にて
清しなりされ也相同しをよしは此御子は
失ひ給ふはかりそのふめ給うこそとて物にて
さらむことしとなり續日本紀に能登内親王かんん
させ給ひ時光仁天皇みことのりにいはく
安加良 朱佐須加事久 於与豆禮加毛年毛 高久
成多流朕乎 置弖 云々 此連とまゐ相同
二十八宿の中に牛宿を深きて毎日年時に給ひ

事は宿曜經の説なり 俗説を用ゐられ
神代紀に天吉葛を給ひ此よきつらとよあ御は
葛は加つらなるなるをたとかと同韻にて通ずる
なるなり此天吉葛は鮑の事にやとあ御しきや
延喜式十八鎮火祭祝詞云 伊佐奈能命与美
津枝坂尓至坐天所思食久 吾名妹命乃所知
食上津國尓心悪子乎生置天來奴止宣天返坐
天更生子水神匏川萊垣山姫四種物并生給
天此能心悪子能心荒比波水神匏垣山姫川萊
持天鎮奉礼止事教悟給支云々

既而牡鹿麥宿嫡所明旦牡鹿語其嫡云今夜
吾背尓雪零於祁利止見支又冊都須紀草生多利止見
支此夢何祥其嫡悪夫復向妾可往乃詐相之
曰背上生草者矢射背上之祥又雪零者白塩
塗宍之祥汝渡淡路嶌者必過船人射死海中
謹勿復往其牡鹿不勝感恚復渡野海中遇逢
行船終射死故名此野曰夢野俗説云刀我野
尓立留真牡鹿母夢相乃麻之尓仁徳紀には
菟餓野鹿乃代夢はれるはれと於きより夢
聖といふよし　以人ゑ　ごきよりて　夢相とも

よむべし
相迷には夢を夜部にのこれ　万葉には夢と夢と
二部ゆらるゝ我なり
思慮よりこれ　いひ出れして　ゆゑ人を思ふ
世の人より志の事なり　手思慮といふ　ひく
なりとも　世の人よりこれ　志のふなり　文字
からはへれと　ひしくかなり
いかしの弄を　そと　畫師ならね　人の情能
なるは用ゆるは　ねよ　ゆるせくかけれとし
なれ弄を　畫師の　かをゆるとしよれとを

蜂なんぞのみぞは ならことに胡桃とかは姿糀
とりかけくるにしへ国より穿ちきてそかくなるなり
古語拾遺云　昔在神代大地主神營田之日
以牛宍食田人千時御歳神之子至於其田唾
饗而還以狀告父御歳神發怒以蝗放其田苗
葉忽枯損似篠竹於是大地主神令片巫志止止鳥
肱巫今俗竈輪及米占也占求其由御歳神為祟云々
宣以牛宍置溝口作男茎形以加之是所以厭其心也
以薏子蜀椒呉桃葉及塩班置其畔云々
此中に呉桃葉を用ゐることはこれらの心をこそなれ

なることいふ事をよるしれてぞ土佐ひ絶す
伊丸の我国よりはじまりさるなん神代より神も
源始より中古に人もかゝはるわかのまちを称て
よろこびて必ず如此なり時より来るなりてあり
名高寺云々
枕草子
津の国なるは ことふ作りなるといへるなんとくへ
六帖
津の国の安芸八合ち流くるこのさ人るなるに
紀すかる虫とんかなへし　注もなし　みもひとへてし

元禄十一戊寅二月初五日

契沖述作